

# 現行学習指導要領での重点から再考する 現代日本の書写教育

## —南オーストラリア州での Handwriting の 学習テキストが示唆する事項を手がかりとして—

信州大学 小林 比出 代

### はじめに —研究の経過と本論考の意図—

筆者は、文字を書くことへの教育（＝書字教育）について日本と英語文化圏との比較研究を行う中で、オーストラリアでは日本語教育に関心が高く、かつその教育が盛行しているのに対し、日本ではオーストラリアの Handwriting の教育に関して論じた文献が見受けられないことを受けて、オーストラリアでの Handwriting の教育について調査考察を始めた。その結果、南オーストラリア州でのナショナル・カリキュラムの役割を担う『SACSA (the South Australian Curriculum, Standards and Accountability)』において、

○コンピューターの使用が飛躍的に伸びた現代ではあるが、児童たちは日常生活の多くの場面で手書きすることが求められ、またその必要性は生涯にわたるため、基本的な書字技能は必要不可欠なものであること。

○Handwriting の育成は、人間としてのアイデンティティを確立するのに欠かせない必須の側面であること。等を基本的な指針に文字を手書きする教育の在り方を改めて見つめ直している例を見出し実状を明らかにした<sup>1</sup>。

本論考では、最初に『Handwriting South Australian Modern Cursive R-7 Language Arts』（以降「テキスト①」と表記）で取り上げている Handwriting の教育にまつわる諸問題への考え方や具体的な施策について分析する。テキスト①は、『SACSA』に基づいて南オーストラリア州の教育省が編集発行した学習テキスト『Handwriting in the South Australian Curriculum 2nd Edition』（2006）（以降「テキスト②」と表記）の原点となるもので、現在の教育現場でも確たる支持を得て活用されている。テキスト①に関する分析結果を、日本の現行学習指導要領で重点を置いている「書字過程」「基礎基本から応用への学習の在り方」「日常化を見据えた学習内容」の観点から考察し、現在日本の書写教育での様々な課題に反映できる要素を明らかにする。

### 1. 『Handwriting South Australian Modern Cursive R-7 Language Arts』の 具体的内容 —日本の書写教育での諸課題に示唆する要素—

テキスト①冒頭の「はじめに」において、本書は、教師たちに「未だ Handwriting の技能が育成されていない児童への Handwriting 学習へのいざない」「アルファベット圏外から移住した児童への支援」「現在の Handwriting が読みにくい、または書字活動に困難点を有し、改善を要する児童への指導」の3点について指南することがねらいである旨が述べられている<sup>2</sup>。

本章では、テキスト①から現在日本の書写教育が抱える様々な課題に示唆を与えると捉えられる内容（訳は小林による）を抽出し、類似する項目ごとにグループとしてまとめ提示する。なお、各グループに冠した見出しは、本論考での考察の便宜上、小林が付したものであり、特に着目したい内容には見出しの横に＊印を、本文中に下線を記す。また、各文末〔 〕内のページ数は当該書でのページ数を、文中（※）は小林による補足を示す。

#### 1-1 「書字過程」の観点から

##### 【筆記具の持ち方】＊

筆記具は、人差し指がわずかに曲げられるよう優しく保持する。筆記具への圧力や指もしくは手に一貫してかかる緊張は、流暢な Handwriting を阻害する疲労やけいれんを引き起こす。中指の第一関節の横に筆記具を置き、親指は筆記具の横（※軸側面）、人差し指は筆記具の上にのせる。小さな空間が親指と人差し指の間にでき

る。緊張が増すので、指は筆記具の先端に近づけないようにする。筆記具と用紙の角度は約45°になる。急な角度も大きな緊張へとつながる。 [p.14]

#### 【用紙と体の位置】\*

用紙と体の位置は、必要に応じた長い時間楽に書く行為が続けられるように、書き手にとって快適でなくてはならない。用紙は書いている手の前腕と直角になるよう置かれ、体は書いている腕に体重がかからない、快適でバランスのとれたサポートがなされる必要がある。目、首、手首、肩、背中の緊張は、心地よくない用紙の置き方や、最適な Handwriting の動きを阻害したり書き手が疲労を起こしたりする体の位置を暗示している。

[p.14]

#### 【体の位置】\*

正しい：書く方の腕は自然に動き、書かない方の腕はしっかり用紙を押さえている。

正しくない：体重が肘で支えられ、足の位置がぎこちなく、目が用紙に近すぎる。

正しい：体がきちんと支持され、腕がテーブルの上でサポートされている。 [p.15]

#### 【書字過程及び書字における指・手・腕の動きの重視】\*

○現代の Handwriting のスタイルは、従来からの Handwriting の省略化が図られたスタイルである。これらは、児童たちの書字における自然な動きは円形や直立した形よりも楕円形や傾斜した形であることに示される、児童たちの初期段階の書きぶり（書き方の傾向）を基としている。（左利きの人は左方向へ自然に傾斜する。）現代における多くの書字スタイルは、これらの自然な動きを利用している。児童たちは小学校入学後、楕円と傾斜を使用した文字の形を教えられる。小文字の構成に関する児童の習熟度が高まると、連続について教えられ、cursive style へとすぐに発展できる。 [p.4]

○South Australian Modern Cursive で用いた基本的な技能は、他の書字スタイルで書く際も推奨し取り入れるべきである。指・手・腕の連動より指のテクニックを使う書字スタイルは書字活動に不向きである。 [p.2]

○Handwriting の動きは、指、手、及び腕の動きが結合したものである。腕は前腕と小指によって軽くサポートされる。このことは、書いている手がページの上をスムーズに動くことを可能にする。前腕を固定しないようにする。指は、文字を形作るために動いている時、軽く曲がるだろう。手は、筆記具と用紙の接点より少し先をスムーズに動いていくだろう。 [p.14]

○正しい：書く方の腕は自然に動き、書かない方の腕はしっかり用紙を押さえている。

正しくない：書いている腕全体を動かすことができない。肩と首全体が緊張している。 [p.16]

○大きな文字の形は、Handwriting の際の指と手と腕の動きの連携を確立し維持するのに役立つ。2mm未満の小さな字の形は、ペンの保持に緊張をもたらし、不正確な字形を識別することをより困難にさせる。

[p.28]

#### 【ペンリフト】\*

ペンリフトは書き手が意識していなくても Handwriting の際に起こる。これらの自然な休息（ペンリフト）は手をリラックスさせ、読みにくさを妨げる。ペンリフトは、個々人の書きぶりや技能に合わせて育成される。これらはいつも同じ文字の前だけとは限らず、単語内において様々な間隔で起こる（発生する）。

児童たちは、特に17～25ページに示された箇所（※South Australian Modern Cursive<sup>3</sup>に関する書きぶりの詳細を解説）以外での、各文字を書く動作中にペンリフトをつくることを思いとどまるべきである。児童たちが書く速度を上げていくに従って、ペンリフトも自然に育成される。

教師は、ペンリフトの機能を認識し、児童たちが必要に応じてペンリフトを用いるよう促すべきである。連続する長い単語を書くのに苦労している児童たちは、手をリラックスさせるためにペンリフトを組み込むことを示される（示範を提示される）べきである。しかし、児童が頻繁にペンリフトを起こしてしまうことに気付いた教師は、その児童が用いている技能や画の連続方法を細かく見てあげる（考察する）ことが賢明であろう。

[p.29]

#### 【書かれる文字自身以外の学習要素の重視】\*

○Handwriting を生み出す技能（例：筆記具の持ち方、用紙と体の位置、書字中の動き）は書きぶりと同様に重要である。 [p.4]

○〔質問〕児童の書きぶりを見ることがなぜ大切なのか？

→児童の書きぶりを見ることが、教師は児童の Handwriting の技能で生じる問題点を認識でき、児童がこれらの問題を克服するための支援ができる。教師は、筆記具の角度と持ち方、用紙と体の位置、書いている腕の支持と書いていない手の使い方を観察できる。用いられる技能は完成する課題と同等に重要である。

[p.35]

## 1-2 「基礎基本から応用への学習の在り方」の観点から

### 【Handwriting の教育を実践する目的】

○Handwriting のプログラムにおける相対的な目的は、読みやすかつ流暢な個々人の書きぶりを確立できるような Handwriting の技能が育成されるよう、児童たちを導くことにある。 [p.10]

○現代の Handwriting のスタイルは、児童たちに、迅速かつ効果的なコミュニケーションのための手段を提供するために開発されて（発展して）きた。 [p.4]

## 1-3 「日常化を見据えた学習内容」の観点から

### 【読みやすさ及び書字速度】\*

○児童たちは、長時間読みやすさと速さを維持できるリラックスした技能を養成する必要がある。 [p.4]

○中学年と高学年の児童たちは、電話のメッセージや、インタビュー、放送内容、講演（講義）の記録によって、速さを伴ったノートの取り方を練習する。 [p.30]

### 【South Australian Modern Cursive の背景】

○学校教育において簡素化された書字スタイルを指導しようとする国際的な動きがあった。これは、Handwriting の技能の育成に関する近頃の合意に起因する。South Australian Modern Cursive は国際的な Handwriting の傾向に基づいている。South Australian Modern Cursive を用いる利点は以下の通りである。

- ・児童たちは自然な動きや落書きに基づいた（書きやすい）書字スタイルを学習する。
- ・文字学習入門期に学習した書字スタイルから cursive style への移行が基礎的な字形の再学習なしにできる。
- ・連続について無理なく育成される。
- ・児童たちは書字速度を育成し、読みやすさを維持するためのリラックスした技能を習得する。
- ・（学習が進み高学年になった時）特定のニーズや個人の好みに応じた South Australian Modern Cursive 以外の書字スタイルを簡単に習得できる。
- ・この書字スタイルは簡単に手に入る筆記具で書ける。 [p.4]

○South Australian Modern Cursive は、南オーストラリア州の児童たちにとって適切な確な手段 — 児童たちが紙の上に自分自身を表現するための書字過程を補足する手段 — である。 [p.3]

### 【Handwriting 学習の日常化】

○幼い児童たちは、書字スタイル、技能、体裁（余白、題名、日付、数学の問題、詩的な形）の育成に関して支援を必要とする場合がある。しかし、児童たちは Handwriting の熟達を促進するために、South Australian Modern Cursive 以外の書字スタイルやレイアウト、様々な筆記具を試してみることが推奨される。 [p.30]

○児童たちは、様々な活動を通して、署名の法的、商業的、社会的な意味を理解する力を養成する。 [p.30]

## 1-4 その他特に日本の書写教育が抱える課題への示唆

### 1-4-1 左利き者の書写教育について

#### 【左利き者の筆記具の持ち方】\*

○左利き者は自分が書いている文字が見えるように、筆記具の先端部よりさらに上を持つ。 [p.14]

○左利き者は筆記具の先端から 3cm 以上離れたところを持たなければいけない。そうすることで、書き手は、手首をかぎ状に曲げたりつったりしなくても、今書いているペン先と用紙の接点を見ることが出来る。 [p.14]

#### 【左利き者の書字及びその指導】\*

○右利き者にとって、右方向へのわずかな傾斜は、cursive の技能が良好に育成されている結果（成果）である。左利き者にとって、左方向へのわずかな傾斜は、指と手と腕の動きをリラックスして行っている児童の自然な結果（成果）である。傾斜は個々人（各単語）で一貫している必要がある。しかし、垂直から左もしくは右へ 5° から 15° の変動（変化）は個々人（各単語）の中で許容される。 [p.28]

○〔質問〕左利き者のためにどのような援助をしたらよいか？

→左利き者が流暢でリラックスした Handwriting を育成しようとするならば、特別な注意が必要である。

- お互いの肘をぶつけないように、右利き者の左側に座る。
- 通常よりも低い机を使う。
- 筆記具は先端部から少なくとも3cm以上離して持つように教える。
- 用紙は真っ直ぐな位置から少し時計回りの位置に回して、体の正中の左側に置く。
- 左利き者を支援するのに適切な技能を用いている左利きの教師や親をお願いする。
- 角度が傾斜しすぎたり、傾斜角度に一貫性がなかったりするのでなければ、左利き者は自然な左傾斜のまま  
で、その傾斜を変える必要はない。(=傾斜方向に関して、右利き者に倣う必要はない。)
- 手と腕が照明を遮らないように座る。理想的には、背後から右肩越しに採光する。 [p.37]

#### 1-4-2 書写学習に困難を抱える児童生徒への指導について

【特別な配慮を必要とする児童たちへの指導】\*

〔質問〕黒板から字形や単語を写すことに困難を抱えている児童にはどのように対処したらよいか？

→以下の考えが、黒板を写すことに困難を抱えている児童の助けとなる(役に立つ)だろう。

- あなたが本や用紙にある字形を説明したり書いたりしている間、児童の横に立っている。
- 児童が黒板に真っ直ぐに座っていることを確認する。
- 児童が指を使って空中や机の上に字形や単語をリハーサルする(下稽古する)ことを奨励する。
- 個人用のアルファベットを机に添付したり、児童の眼の高さにわかりやすく簡易な図を掛けたりする。
- 文字を形作れるように児童の手を先導する(導く)。 [p.38]

#### 1-4-3 カリキュラム・授業計画について

【学校での実践方針】

学校の Handwriting に関する方針は、学校全体や個々のクラスでの指導手順の指針(ガイドライン)を提供する。その方針は、スタッフの討論や実践を通して発展する。また、以下のような要件も含まれるべきである。

- Language arts プログラムにおける Handwriting の位置づけ
- 空白もしくは野を引いた帳面(ノート)の利用
- 左利きの児童のための指針
- 教材の割り当て
- 新しいスタッフの育成
- 学校内外での連携
- 評価及び報告の方法
- プログラムを観察(チェック)する手順 [p.7]

【学習の継続性】

○時間割においては定期的な練習を設けることが必要である。

- 毎日短時間の練習
- 毎週2～3時間半の授業
- Language arts の時間の一部に組み込んだ学習 [p.9]

○〔質問〕Handwriting を指導するため組織的に選択することは？

→10分から15分の規則的な日常の練習は Handwriting の学習目的に有効である。 [p.33]

## 2. 日本の書写教育における諸課題の考究

—『Handwriting South Australian Modern Cursive R7 Language Arts』を参考に—

本章では、前章をふまえ、現代日本の書写教育での諸課題に関し、テキスト①の内容と照合しながら考察する。

### 2-1 「書字過程」の観点から

第一に、筆記具の持ち方について詳細な説明がなされていることに着目したい。テキスト②で望ましい鉛筆の持ち方や、右利き者と左利き者それぞれでの場合の鉛筆を持つ位置(先端部からの長さ)を明示していた<sup>4</sup>が、テキスト①には更に詳しく具体的な説明が記されている。親指・示指・中指と筆記具の位置関係や筆記具と用紙の角度の他に、筆記具を把持する筆圧に関する記述や、望ましい持ち方の観点に、書字活動中の書字者の視線を筆記中の文字に無理のない角度で向けることを挙げている点も特筆すべきである。なお、日本の場合、筆記具と用紙の角度は約60°が望ましいとされる<sup>5</sup>が、テキスト①では約45°としている。「約45°」の根拠については検証を要する。

第二に、姿勢、及び体と用紙の位置関係に注意を促していることに着目したい。テキスト①には、長時間の書

字活動を快適に行うための用紙の置き方が細かく記述され、用紙の置き方は望ましい書字活動の要件とされる。

望ましくない用紙の置き方や体の位置の指標として、目、首、手首、肩、背中の緊張感を挙げているが、他の説明箇所からも、書字中の指・手・腕の動きにはかなりの重点を置いていることがわかる。学習文字の望ましい大きさもこの観点から説明が加えられている点に注目したい。テキスト①では、書字動作は指と手と腕の自然な連携により生成されることを一貫して重視し、書字の際は書いている腕全体が動くことを重んじている。従って、文字学習入門期の場合は、幼児たちが呈する自然な動きや好んで行う落書きでの動きを根底に置いた無理のない書字動作や字形が学習内容の中核にある。文字学習入門期の学習文字は、児童の書きやすい動きや形から出発し、児童の実態に合わせて改良されていると言える。さらに、左利き者の書字では左方向への傾斜が自然だとする点も特記しておきたい。

第三に、書字過程に関するテキスト①での特徴的な概念として、「ペンリフト」に着目したい。「ペンリフト」とは、書字活動において自然に筆圧を抜くこと、ペンの軸の力を0にすること、休止のことである。前章の通り、ペンリフトは書字動作中、無意識のうちに起こるものであり、書字中の手を緊張や疲労から放ち、読みやすい字の生成にも寄与する。この点はテキスト②でも詳細に解説している<sup>6</sup>。また、ペンリフトでは書字動作に伴って起こるリズムを重視する<sup>7</sup>。

これまでの日本の書写教育で、ペンリフトとの概念はあまり取り上げられなかった。日本の、特に硬筆書写では含み置きにくい要素とも推察できる。しかし、例えば、小学校低学年で点画の長短について学習する際、「青」の4画目で1回休む（＝ペンリフトを入れる）ことで自ずと一画強調が体现できる。このことから、文字を静的な図形・字形としてではなく、書字過程での動的な動きとして習熟できるようになる。ましてや、毛筆での学習全般、中でも行書の学習においてペンリフトの重要性は更に増す。書字のプロセスを重視する際に、筆圧が0になり線がとぎれた休止状態時そのものへの着目は、書字動作での動いている只中への関心と同等に注がれるべきであろう。書字過程を重んじる学習で、ペンリフトとの概念やその学習指導は日本の書写教育においても重視すべき要件である。また、テキスト①は、ペンリフトの意義や効用を知識の上で理解させる姿勢も打ち出している。これは、日本での現行小学校学習指導要領で、例えば、第3及び第4学年に文字の組み立て方を「理解し」、点画の種類を「理解する」との文言を新たに加え、それまで態度の問題だった内容が知識の問題として重んじられるに至った点と共通する。

このように、テキスト①には、書字過程に関わる学習要素は、書字行為の結果として現れる文字自身と同じ比重で重視すること、目の前に提示される書きぶりとそこに至る過程には同等の重さを置くことが繰り返し述べられている。南オーストリア州の Handwriting の教育で如何に書字過程を重視し、実際の学習指導に反映しているかが読み取れる。

## 2-2 「基礎基本から応用への学習の在り方」の観点から

Handwriting の学習目的は、読みやすかつ流暢な自分自身の書きぶりを確立することにある。この時、児童たちが自分の書く文字を肯定し、自信が持てるよう学習展開することが重んじられている。また、Handwriting はコミュニケーションの効果的な手段としての価値や重要性を持つことを、児童自身が知識として理解する点も挙げられている。書写の学習において知識面と技能面の双方に焦点をあてた、日本の現行学習指導要領の在り方と通じる点である。

## 2-3 「日常化を見据えた学習内容」の観点から

書字過程を重視した学習展開の中で日常生活に生きる Handwriting の教育を見据えた時に、その具体的な学習内容として、学校生活や日々の生活で想定される諸活動が盛り込まれることは日本の場合と同様である。

日常生活に署名することが根付いた文化圏で各人の署名の体裁は大切な視点となる。Handwriting の学習の出口の一つに署名の確立を掲げて、様々な書字スタイルに親しむ。South Australian Modern Cursive を教育活動に用いる一つの利点は、他の書字スタイルへの転用性の高さにあった。South Australian Modern Cursive から他の書字スタイルへの転用を視野に入れた学習指導は必須となる。生きて働く文字が書ける能力の育成にあたり実際の書字活動に近い学習内容を掲げる指針は、日本の場合、例えば、現行中学校学習指導要領の第3学年で「目的や必要に応じて、楷書又は行書を選んで書くこと」を掲げていることに見出される。また、現行小学校学習指導要領の第5及び第6学年に「目的に応じて使用する筆記具を選び、その特性を生かして書くこと」を掲



げる点と、テキスト①において Handwriting の学習の際に様々な筆記具を試すことを推奨する点も双方の指針に共通する部分である。

## 2-4 その他特に日本の書写教育が抱える課題への示唆

はじめに、左利き者の書写教育に関して考察する。

筆者は、拙稿「左利き者の望ましい硬筆筆記具の持ち方に関する文献的考察—書写教育の見地から—」（『書写道教育研究 第20号』収録）で、日本での左利きに関する社会的文化的な圧力は強く、書字に関する疑問や不安は大きな比重を占めると指摘した。その上で、生物学や心理学分野での諸研究に立脚した際、利き手の変更は脳機能の変更をもたらさず、書字行為のために左利きを右利きに変更させる決定的な論拠は皆無であることより、「利き手」との観点から右手と左手の平等性に立脚し、左利きの児童生徒が無理なく書字に臨めるよう、左利き者の立場に立った書字及びその教育の在り方を探究することが必要であると述べた。しかし、その後も書字に関わって利き手を「直す」か否かとの問題は後を絶たない。本学会においても、第27回大会ラウンドテーブルで左利き者への学習指導に関する質問や意見が活発に交わされている<sup>8</sup>。現実問題として、左手書字への不安や課題は文字学習入門期をはじめとした児童の書写学習に対して今も恒常的に集中すること、それは、これまでの書写教育が左手書字に関する具体的な方策を立ててこ（られ）なかったことにも起因する点を勘案すると、たとえ些細な事項でも、左手で書字活動を行う児童への指導に関わる書写教育の立場からの指南が求められていると考える。教科書や教師用指導書等を通して左手書字の児童に具体的な示唆を与えることは、現在書写教育に携わる者へ課せられた喫緊の使命であろう。

以上の論点から再度テキスト①での左利き者の Handwriting の教育の在り方について考察すると、筆記具の持ち方、望ましい書きぶり、実際の指導方法それぞれに関して、より具体的な指南が提唱されていることがわかる。テキスト①と日本の場合とでは、テキスト①で提言する左利き者の筆記具の持ち方や用紙の置き方がそのまま日本の場合に当てはまるかは改めての検討を要する。また、右手書字ではアルファベットが右傾斜になるところ、左手書字では文章全体の傾斜角度に一貫性があれば自然な左傾斜も良しとする在り方が、右手書字で右上がりとなる日本の文字の場合に適応されるかについても軽率な判断はできない。しかし、筆記具の持ち方、用紙の置き方、左利き者にとって自然な文字の傾斜角度等に関する既述の視点を手掛かりとして、日本の場合での検証は試みられるべきであろう。また、左利きの児童が書字活動を行う際の教室での座席の位置等、その他の詳細な記述に関しても、日本の場合に応用できる点が含まれる。まずはこれらの具体的な内容を日本の書写用教科書や教師用指導書に提示できるか検証するのは意味あることだと考える。ちなみに、テキスト①では、先述の通り Handwriting の学習指導に関する学校での実践方針に含むべき要件として「左利きの児童のための指針」を挙げている。また、「体の位置」と題して望ましい姿勢や筆記具の持ち方、用紙の置き方を提示したイラストの説明には、筆記具を持つ手腕を「書く方の腕」、筆記具を持たずに用紙を押さえる手腕を「書かない方の腕」と記し、「右手」「左手」との語は用いていない。筆記具の持ち方及び用紙の置き方に関しては、右利き者と左利き者双方の図をペアの形で提示している<sup>9</sup>。

上記以外の課題として、書写学習に困難を抱え特別な指導を要する児童への提言が示されていること、その中で、空書による学習や教師自らが児童の手を取って手指の動きを誘導する指導を推奨すること、また、短時間で規則的定期的な学習を継続することが推し進められていることは、日本の場合にも取り入れたい在り方である。このような、南オーストラリア州における Handwriting の教育体制の根底には、Handwriting の学習が国語科の学習の一部として組み込まれ、国語科の学習として機能することに眼目を置いているとの、テキスト①の基本指針がある。

## おわりに

文字体系も文字学習に用いる要具も手書き文字に関わる伝統文化も異なるオーストラリアと日本であるが、「手で文字を書くこと」の教育を軸に双方での在り方を見つめた結果、予期せぬ共通点や直面している課題への手がかりがつかめることとなった。本論考での考察を通して洞見した事項について具体的な検証を行うことが今後の課題である。

なお、本論考では、現代日本の書写教育を多角的に見つめ直すための示唆を有すると考えた、南オーストラリ

ア州の Handwriting の教育への考え方や施策に注目したが、これはオーストラリアでの Handwriting の教育の在り方を絶対視するものではない。さらに、本論考には日本の硬筆書写に特化して論を展開した箇所があるが、実際のところ、日本の書写教育と毛筆書写ないしは書道が存在しない文化圏の教育とを比較することには困難が伴う。しかし、文字を書くこと、すなわち「目の運動」と「指・手・ウデの」「筋肉運動との連動による」「総合的な運動」<sup>10</sup>そのものに着目した場合、その教育の比較において文字体系や学習用具の相違は二次的な問題になると考える。本論考は毛筆書写の存在や意義を問うものではないことをお断りしておく。

【謝辞】 本研究に際して貴重な資料をご提供くださった阿部真理子先生に深謝申し上げます。

- 
- 1 小林比出代『『SACSA』にみる南オーストラリア州での Handwriting の教育及び学習テキストに関する基礎的研究』／『書写書道教育研究 第28号』2014
  - 2 Education Department of South Australia, *Handwriting South Australian Modern Cursive R-7 Language Arts*, 1984, p.2.
  - 3 小林比出代 前掲書 p.39.
  - 4 『書写書道教育研究 第28号』2014, p.41.
  - 5 押木秀樹 他「望ましい筆記具の持ち方とその合理性および検証方法について」／『書写書道教育研究第17号』2003, p.14.
  - 6 『書写書道教育研究 第28号』2014, p.41.
  - 7 『書写書道教育研究 第28号』2014, pp.41-42.
  - 8 『書写書道教育研究 第27号』2013, p.106・pp.125-126.
  - 9 Ibid, pp.14-15.
  - 10 平井昌夫『国語教育学原理』明治図書 1969 p.230.